

海軍少将から代議士に転じた井上敏夫

柴崎 力栄

知的財産学部 知的財産学科
(2010年5月31日受理)

INOUE Toshio, A Rear Admiral-turned Lower House Representative
by
Rikiei SHIBASAKI
Department of Intellectual Property,
Faculty of Intellectual Property
(Manuscript received May 31, 2010)

Abstract

It was in 1906 when Rear Admiral INOUE Toshio (井上敏夫) quit his career at the Imperial Japanese Navy (IJN). Just before the Russo-Japanese War of 1904-1905, he was the captain of the main battleship Fuji (戦艦富士) and successfully commanded two experimental voyages through the Kanmon Straits (関門海峡) which is a shortcut route between the Inland Sea of Japan (瀬戸内海) and the Tsushima Strait (対馬海峡). His success made it possible for the IJN to explore the fleets freely throughout the expected sea theater against Russia. He became the captain of the auxiliary cruiser Hong Kong Maru (香港丸) after the war was opened. Southward dispatch around Singapore and Sunda Strait between December 1904 and January 1905 was a typical experience of remote power projection. His expertise of navigation led him to his later career. In 1907, he was interviewed by a reporter regarding the Kanmon Port planning. And in 1908, he was asked to be a representative of the Lower House of the National Diet by the constituency of Yokkaichi City (四日市市) of Mie Prefecture (三重県). The local residents expected him to be a driving force for the completion of the Yokkaichi Port.

キーワード； 海軍，日清戦争，日露戦争，戦艦，関門海峡，仮装巡洋艦，港湾調査会，衆議院議員

Key word； Navy, Sino-Japanese War, Russo-Japanese War, Auxiliary cruisers, House of Representatives

1. はじめに

19世紀後半、蒸気船による遠隔航路の開設と大陸横断鉄道の建設が、世界規模の交通路を変化させ、国家間の地理上の相互関係にも影響を及ぼした。当時はまだ船舶用無線電信機も船舶用レーダーもなく、軍艦も商船も漁船も、無事に航海を終えて帰港すること自体が技術的困難さを残す課題であった。航空交通による大気圏の利用や宇宙開発がまだ存在しない当時、海洋の交通路としての利用、遠洋漁業の試行、それらを保護するための海軍建設は国力を投入すべき対象であった。海軍と民間船舶の世界は密接に繋がり、海洋を越えた国民的発展の言説が影響力をもった。日本の明治時代から大正初期について、いままで着目されることの少なかった幾人かの人物を列伝風に記述することで、海洋国家日本の成立期を描くことを考えている。

先に『近現代日本人物史料情報辞典4』（吉川弘文館、平成22年11月刊予定）に、肝付兼行（海軍水路部長、海軍中将）、井上敏夫（海軍少将、衆議院議員）、寺島成信（海軍編修書記、日本郵船幹部社員）の項を執筆した。このうち本号では、井上と寺島について辞典には記すことのできなかつた論証部分を提示する。なお、二人は活動領域が異なり検索キーワードも別なので、別個の研究ノートとした。

井上敏夫（いのうえとしお、安政4年（1857年） - 大正13年（1924年））は、海軍兵学校第5期出身の海軍少将である。現役を退いて、逓信省管船局所管の財団法人・日本海員掖済会の理事となり、さらに、三重県四日市市から推されて第10回・第11回衆議院議員総選挙に当選して政友会所属代議士となった。航海術を得意とする兵科将校としての前半生の経歴が、制服を脱いだ後の進路を生み出した。

井上を主テーマとした先行研究はない。石田龍次郎「『東京地学協会報告』（明治12 - 30年） - 明治前半の日本地理学史資料として」（社会学研究10、昭和44年、石田『日本における近代地理学の成立』同59年に収録）、安岡昭男「初期の東京地学協会と軍

人」（政治経済史学400、平成2年）が尉官時代の地学協会における報告に論及し、土田宏成「戦前期陸海軍出身議員に関する予備的考察」（史学雑誌109-3、平成12年）が、将官から衆議院議員への転身に言及している。

以下、公文書・私文書を含む原史料、刊行物、研究など井上に関する史料の所在を、出典註を含め整理して記述し、前記辞典の補遺とする。

2. 原史料と履歴概観

平成18年（2006年）にブログに井上敏夫のことを記述したところ、孫の井上貞夫さんからコメントを頂戴した。今回、関係史料の所在について問い合わせのメールを投じたが、ご返事をいただけなかった。一方、公的な史料所蔵機関が保存する個人文書を探索する作業として、国立国会図書館憲政資料室が所蔵する政治家・軍人などの個人関係文書を調査したが、井上敏夫が同時代の他の人物に宛てた書翰の残存は確認できなかった。

軍人としての履歴は、『日本海軍史9 将官履歴』（海軍歴史保存会、平成7年）の記述が詳しいが、退官以後については何も記されていない。同書は、終戦まで海軍省が保管整理し、戦後、厚生省に移管された旧海軍軍人の奉職履歴書正本にもとづくため、現役を退いた後の海軍外の経歴情報が欠けているのであろう。

一方、郷里石川県の著作、石林文吉『石川百年史』（石川県公民館連合会、昭和47年）は、同県出身の海軍将官を列伝風に論じたなかで井上を、明治「四十一年転身して四日市から代議士に選ばれ、のち半生を日本海員掖済会に捧げた」と評する。石川県の地方紙『北国新聞』大正13年（1924年）3月15日号の訃報は、井上が「相州鎌倉大町の自邸」で逝去し、青山墓地に葬られたと報じる。以下、生涯の時期を追って記す。

3. 航海術を得意とする兵科将校

海軍兵学寮の生徒時代に、台湾出兵と西南戦争のため授業が休止され、海上勤務を経験した。前掲『日本海軍史9』には、尉官時代までの経歴がつぎのように記されている。

- 4. 9. 25 海兵寮入寮
- 7. 10. 20 高尾丸乗組
- 11. 14 再入寮
- 9. 9. 5 筑波乗組
- 10. 2. 28 浅間乗組（鹿児島征討）
- 7. 11 筑波乗組（濠洲回航）
- 11. 7. 27 海兵校卒
- 8. 16 海軍少尉補
- 9. 9 富士山乗組
- 12. 3. 26 高尾丸乗組
- 13. 4. 2 竜驤乗組（濠洲タスマニヤ国回航）
- 14. 1. 26 海軍少尉
- 15. 11. 28 筑波乗組
- 16. 9. 17 富士山乗組
- 11. 5 海軍中尉
- 12 海兵校出勤
- 22 海兵校教授
- 17. 5. 23 摂津乗組兼海兵校教授（18. 9. 24 免兼）
- 10. 22 摂津航海長
- 18. 5. 20 兼海兵校監事
- 9. 18 筑波航海長
- 19. 6. 17 海軍大尉
- 11. 22 海兵校航海術教授
- 20. 7. 30 兼海兵校生徒分隊長
- 22. 5. 15 金剛航海長（布哇国回航）
- 23. 5. 13 日進分隊長
- 7. 12 金剛分隊長（トルコ回航）
- 24. 7. 23 横軍港司令官副官
- 25. 7. 26 海軍参謀部出仕
- 9. 5 在清国公使館附（27. 8. 17帰朝）
- 12. 21 海軍少佐

この時代に関する史料として、航海談を東京地学協会で報告した事例が2つ残る。龍驤乗組士官として濠洲・タスマニアに往復した明治14年（1881年）の航海に関して「南北太平洋風潮実験略記」（東京地学協会報告5・4，明治16年），金剛分隊長としてトルコに往復した明治23，24年（1890，1891年）の航海についての「土耳其航海紀行」（同13・2，同24年）である。東京地学協会は、1879年（明治12年）に創立され、地質学と地理学の学術研究団体として現在まで存続している。初期の会員は政治家、軍人、外交官、華族で構成され、例会では、探検家や軍人などから日本人が未踏破の地域の旅行談や探訪談を聴くことが行われた。井上もそうした場で講演した陸海軍人の一人であった。

明治19年（1886年）11月から同22年（1889年）5月までの海軍兵学校航海術教授時代、『航海術教授書 巻之二』（3版，海軍兵学校，明治24年，東京海洋大学附属図書館所蔵）の「訂補」を残している。これより先に刊行された『航海教授書』（初版，海軍兵学寮，明治4年，国立国会図書館所蔵）の改訂を井上が行ったものである。

4. 日清戦争直前の諜報活動

明治25年（1892年），海軍参謀部から公使館付武官として北京に派遣された。10月天津に到着し，12月少佐に昇任した。『对支回顧録 下』（对支功労者伝記編纂会，昭和11年）677頁は，将来の想定戦地沿岸の兵要地誌調査に携わったと記す。

公使館附武官としての功績は顕著なものがあり、前後三回に亘つて旅順、大連湾、威海衛の要塞地帯に潜入して具さに兵備を調査し、殊に廿六年五月、二十三呎の支那小船を買入れ約二箇月を費して直隸遼東沿海及び朝鮮西海岸を綿密詳細に調査した。廿七年六月十一日清国兵天津を出発し牙山に向ふや、君は其状況を詳細に探知して報告し我が朝鮮派遣軍に資与する所多大であつた。日清戦史の冒頭に記載された此の

軍令部長宛の報告は良く戦前の支那側の全貌を窺ふに足る名文である。後ち芝罘に転じ伊集院領事、出羽赤城艦長等と協力し威海衛にある北洋艦隊の動静に注意し適切なる報告を為して八月帰朝

この場合の「日清戦史」とは 戦後海軍が編纂し、防衛省防衛研究所に残る『征清海戦史（草稿）』第15編「本省及軍令部設計」第58章「牒報」第1節「清国兵の朝鮮国に派遣始末」が該当する。現在ではアジア歴史資料センター（国立公文書館が提供するインターネットサイト、リファレンスコードRef. C08040560100）において閲覧できる。また、日清戦争開戦期の明治27年（1894年）6月、7月に在芝罘領事館から海軍軍令部長に宛てた井上の報告電報は防衛研究所所蔵「海軍公文備考」のうち「明治27・8年 戦史編纂準備書類」のうちに残る。アジア歴史資料センターにおいてキーワード「井上敏夫」を用いて容易に検索できる。

前掲『対支回顧録』は、海軍による対清諜報活動として同時期に在天津領事館に派遣された滝川具和（安政6年（1859年）～大正12年（1923年）海兵6期、大尉、のち少将まで昇進）の例に並べ、井上に言及している。

5. 戦艦富士と関門海峡

『日本海軍史9』には、日清戦争の戦中から戦後にかけての経歴がつぎのように記されている。

- 27. 9. 7 西海艦隊航海長
- 28. 2. 20 常備艦隊航海長
- 9. 18 松島副長
- 12. 27 廠島副長
- 29. 4. 20 松島副長
- 8. 7 佐鎮参謀
- 11. 17 兼佐鎮海岸望楼監督官（30. 2. 4 免兼）
- 30. 6. 16 兼佐鎮海岸望楼監督官
- 10. 8 佐鎮副官

- 12. 1 海軍中佐
- 31. 5. 3 济遠艦長
- 6. 28 海軍大佐
- 7. 19 豊橋艦長
- 32. 5. 1 千代田艦長
- 9. 29 英国出張（出雲回航委員長
- 33. 12. 8 帰着）
- 33. 3. 14 出雲艦長
- 35. 3. 12 富士艦長
- 36. 9. 26 横海兵団長
- 37. 1. 18 香港丸艦長

巡洋艦出雲の回航委員長から艦長を務めた後、明治35年（1902年）3月から翌年9月、戦艦富士の艦長として、2度に渡り、関門海峡の試験航行を成功させた。最初は、同35年8月26日、西から東へと関門海峡を通過した。井上敏夫「軍艦富士馬関海峡通過顛末」（水交社記事1 - 4, 35年12月）、同「瀬戸内航路二就テ」（同2 - 1, 36年3月）が井上自身による報告である。2度目は、36年9月17日、前回と異なり弾薬、石炭、糧食等を満載した出師準備状態で東から西へ通過した。『防長新聞』の関連記事に、明治35年（1902年）8月26日号「富士艦の通過」、明治36年（1903年）2月4日号「艦船通過と海峡航路標識」、同年9月18日号「関門海峡試航」がある。日露戦争後、より大型艦が関門海峡を通航するようになると、富士の試験航行は先例として言及されるようになる。明治40年（1907年）の二つの記事、石橋甫「軍艦吾妻下之関海峡通航記事」（水交社記事4 - 1, 40年3月）、『防長新聞』明治40年6月19日号「大戦闘艦関門通過に就きて」がある。なお瀬戸内海と関門海峡における大型艦の航行可能性は、明治30年（1897年）、富士・八島が英国より回航され、横須賀に到着する頃より海軍にとって関心の的であった。防衛研究所所蔵「明治三十年公文備考艦船三止水路卷六」のうち「馬関海峡堆砂ニ関シ取締方」（アジア歴史資料センター、Ref. C06091103500）、同「明治三十二年公文備考水路兵員卷十二」のうち「内海及下ノ関等航路標識其他信

号所設置方並水深減少防止ニ関スル件」(同, Ref. C06091218200)および「馬関海峡堆砂ニ関シ取締方」(同, Ref. C06091218300)が関係記録である。

6. 仮装巡洋艦香港丸

日露戦争中は、仮装巡洋艦香港丸の艦長を務めた。特筆すべき作戦行動に、明治37年(1904年)12月から翌年1月にかけて2艘の仮装巡洋艦、香港丸と日本丸を率い実施したシンガポール・スダ海峡方面への偵察、牽制行動がある。防衛研究所所蔵『極秘明治三十七八年海戦史』第2部「戦記」巻1第1篇「露国増遣艦隊ニ対スル作戦準備」第5章「香港丸日本丸ノ南洋巡視 附 新高ノ南清巡視」(アジア歴史資料センター, Ref. C05110083700), 同第2部「戦記」巻1「備考文書 第五号 香港丸艦長海軍大佐井上敏夫ノ提出セル明治三十七年十二月ヨリ三十八年一月二至ル香港丸日本丸ノ南洋方面巡航報告」(同, Ref. C05110084000), および、外務省外交史料館所蔵「日露戦役ノ際露国東遣艦隊ノ来航ニ対シ帝国艦隊南洋へ出動一件」(外務省記録5門2類2項, アジア歴史資料センター, Ref. B07090620700)が関係記録である。

7. 義勇艦隊建設募金

『日本海軍史9』によると、日露戦争後、逝去までの井上の履歴はつぎの通りである。

- 38. 6. 14 海軍少将・特務艦隊司令官
- 11. 4 待命
- 13 呉港務部長兼呉予備艦部長
- 39. 5. 28 予備役
- 大正 3. 3. 1 後備役
- 7. 8. 12 退役
- 13. 3. 9 没

明治39年(1906年)5月28日の予備役編入の直後、有栖川宮威仁親王(皇族, 海軍大将, 現役)を総裁とし、有地品之允(男爵, 海軍中将, 後備役)を理

事長とする帝国海事協会の提唱する義勇艦隊建設募金のための遊説に参加した。『読売新聞』同年7月14日号「義勇艦隊の遊説」は、有地理事長を助け、井上敏夫、尾形惟善、舟木鍊太郎という三人の予備役少将と、待命中の成川揆大佐が、手分けをして全国を回ると報じる。『日本海事協会五十年史』(昭和24年)第11章「関係人士の追憶」では、尾形と舟木は、明治37年(1904年)に義勇艦隊創設委員となり、翌年以後は評議員となっている。成川も明治41年(1908年)から評議員となる。一方、井上は海事協会には加わらず、『日本海員掖済会五十年史』(昭和4年)「役員就退任表」によると、明治39年(1906年)から大正2年(1913年)まで同会の理事を務めた。

8. 内務省港湾調査会

『防長新聞』明治40年(1907年)7月6日号「関門水路整理策(井上海軍少将談)」で、井上は、富士艦長としての経験にもとづき私見を語った。『読売新聞』同年7月8日号社説「関門海峡の整理(下)」がこれを全国に紹介した。『防長新聞』同8月22日号「馬関海峡改築方針」によると、内務省港湾調査会での審議に向け、海軍部内では事前に軍事上の観点から関門港整備について意見を取りまとめている。井上談は、外部においてそれと呼応した広義の海軍関係者の発言であった。

9. 衆議院議員

井上は、明治41年(1908年)5月15日の第10回衆議院議員総選挙に、海員掖済会理事として海員寄宿舎建設のため訪れた三重県四日市市から推されて当選した。『四日市市史18 通史編近代』(平成12年)は、「井上が港について一見識を持っていたことと、四日市が官途に一人として相当な地位を占めている郷土出身の先達を持たなかったこと」がその理由であったと記す。当初、戊申倶楽部に所属したが、翌明治42年(1909年)、石川県出身の同郷人、戸水寛

人（石川県第3区選出，第10～14回総選挙に当選5回）・米田穰（石川県第4区選出，第10，11，13，14回当選）とともに立憲政友会に移った。なお、前掲・土田「戦前期陸海軍出身議員に関する予備的考察」によると佐官・将官出身の衆議院議員が増加するのは大正9年（1920年）の第14回総選挙以降であり，井上は，それ以前の軍人出身の帝国議会議員が稀な時期の例である。同論考掲載の表「陸海軍出身衆議院議員一覧」によると，明治37年（1904年）第9回総選挙0人，明治41年（1908年）第10回総選挙は井上の1人，明治45年（1912年）第11回総選挙では井上以外に2人の当選者，片桐西次郎（海軍主計大監，東京府郡部選出，当選1回，中正会），八田裕二郎（海軍大佐，福井県福井市選出，当選第10回・11回，立憲政友会 憲政会）がいた。

衆議院議員としては第25議会（庚申倶楽部所属），第26から35議会まで（立憲政友会所属）を経験した。この間，明治43年（1910年）12月召集の第27議会に「船舶法中改正法律案」「船舶検査法中改正法律案」（船舶検査の義務免除範囲を20噸未満から30噸未満に拡大，貴族院の否決で廃案），明治44年（1911年）12月召集の第28議会に「船舶法改正に関する建議案」（前年の法改正案と同趣旨），同第28議会と翌大正元年（1912年）12月召集の第30議会に「水先法中改正法律案」（水先案内人の60歳定年を撤廃，両議会ともに貴族院の否決で廃案）の提案者の1人となった。民間海事業者に対する逓信省管船局の規制権限を緩める法律案が提出されており，海事族議員のグループが成立していたと推測される。少なくとも，米田穰（立憲政友会），武田貞之助（滋賀県郡部選出，第10回総選挙当選1回のみ，立憲国民党）が井上と同様の動きをしている。先立つ明治42年（1909年）12月召集の第26議会には「海事政策殊ニ其航業上ノ監督及実績ニ関スル質問」を武田が提出し，仲小路廉（逓信省次官）が答弁した。『読売新聞』明治44年（1911年）2月4日号，9日号には，第27議会，同年2月3日，8日の委員会において提案説明を行った井上と，船舶法等の改正に反対する仲小路

との応酬が報道された。第28議会，明治45年（1912年）3月7日の「小名浜軽便鉄道ニ関スル建議案」「小名浜港改良ニ関スル建議案」の委員会では，委員長を務める井上が，前年夏に福島県小名浜を実地調査した経験から賛成意見を述べた。

『読売新聞』大正2年（1913年）3月30日号に，西園寺総裁留任勧告委員の10名のうちに東海地区から井上が選ばれたとの記載がある。この時期には党内で存在感をもつようになっていたのであろう。

10. 著作等

著作等が国会図書館に3点残る。第1は，日本海員救済会理事として著した小冊子『海国民之事業』（奥付なし，内容から明治43年と推定）である。救済会は，日本赤十字社，帝国水難救済会，帝国海事協会，愛国婦人会，大日本武徳会など同様に，府県・郡・市町村を通じて寄付予定額を割り当て，寄付会員を募る組織形態であり，その際に用いられたパンフレットである。米国海軍アルフレッド・セイヤー・マハンのシーパワー論が，海権論と呼ばれ，海事思想涵養の基礎理論として咀嚼，援用されている。第2は，海国日報記者，伊古田天囚（宗蔵）に委嘱して著述させ，自ら校閲した『海員出身便覧』（明治41年）で，海員を志す青年に対する進路案内書である。第3は『第二十七回衆議院重要問題名士演説集』（明治44年）であり，井上による日本海員救済会国庫補助金増額の建議，建議理由書，説明演説が掲載されている。